

葉集を読む

松岡 隆子

手のぬくみ残し夫逝く浅き冬

安達みわ子

〈夫逝く〉という文字に一瞬選句の手が止まった。安達さんはまだ60歳になられたばかりだ。今からと言う時にご夫君が亡くなられるとは……。信じられない思いでお悔みの電話がかけた。ご夫君の入院先から連絡があったときは勤務中だったが、看護師仲間の一人に交代してもらい最期を看取ることが出来たと話された。消えてゆく命を見つめながら握り締めた手の温みは何時までも安達さんの胸の奥に残っていることだろう。同時作の〈銀杏落葉踏みつけて行く霊柩車〉に、安達さんの憤りにも似た悲しみが思われ心が痛む。心よりご冥福をお祈りします。

触れ合うて蓮に兆す枯の音

醍醐喜美枝

触れ合うて傷つけ合うて破はちす

渡辺 正吉

夏の間青々と茂っていた蓮の葉は秋になると次第に色褪せてきて傷つき破れていく。吹きすさぶ風に身を打ち合いながらもますます破蓮となつていく景を、それぞれの視座で捉えて

いて印象深い。

一句目は、葉はくしゃくしゃになって、枯蓮となる寸前の破蓮のようだ。茎を打ち合う音を枯れの兆しの音だと捉えた繊細な感性は作者の持ち味と言える。

二句目の、触れ合いながら傷つけあっているという把握はなかなか鋭い。人生の裏側を見る思いだ。

〈触れ合うて〉と出だしは同じだが、それぞれに作者ならではの観点で捉えた破蓮が見える。

秋燈下ペーパーナイフ葉とし

矢作 裕子

夜もずいぶん更けてきた。今日はひとまずここまでと読みかけの頁に葉を挟む——となるのだが、あるはずの葉が見当たらない。取りあえず手元のペーパーナイフを挟んだ、という状況のようだ。調べ物をする時などあちこちの頁に葉を挟む必要があり、手近にある紙片やハガキなど何でも葉代わりに挟むことがある。ペーパーナイフとは粹だ。燈火親しの秋である。

突然に兄の訃落葉落葉かな

河本 順

訃報はいつも突然来る。河本さんが受けた兄上の訃報もあまりに突然だった。健康には人一倍気を付けている兄だった。その兄が亡くなったとはどうしても信じられなくて、ただ呆然としている河本さんの姿が想像される。櫻も銀杏もどつと散つていく。(落葉落葉かな)のリフレインが胸を塞ぐ。